



ぐっと細くなった。担任も何とかして飛び箱を飛ばせたいと指導してくれた。そして、やっと飛べる様になった。一つできると自信というのはすごいもので、学校にあった一番高い飛び箱まで、とんとん飛べる様になってしまった。その時の体育の成績が4。この時は、うれしかった。努力してできるようになったことが評価されたのだから。

通信簿というものは、不思議なものである。なければいいと思うこともあるし、なければ物足りない気もある。今の通信簿のあり方についていろいろ言われるが、ここで通信簿の是非やあり方などを述べようなどとは思っていない。私がどうこう言うには、大きすぎる問題だ。だが、我が家の娘が入学して二年たち、通信簿をめぐっての様子をここへ記そうと思う。

### 〈初めての通信簿〉

一年生に入学した時は、そのうち学校へ行くのがいやだと言いだすのではないかと心配していた。どうしてか

と云えば、娘は机に向かっているより、外で遊んでいることが好きだし、与えられたことをするより、自分で楽しいことを見つけていくことが上手な人だから、学校というものが、かなり苦痛であろうと思われたのだった。

心配は二週間程で現実になった。発熱で休んでから、行きたくないが始まったのだ。保育園の時にも一度やっていたので、まあ好きだけ休めばいいと思うことにした。そうは言っても、このままずっと休むのかなとも思うので、父親も私もいろいろ考えた。勉強は私が教えてもいいのだが、学校は勉強だけではない。自分の小学校時代を思い出してみると、友だち、上級生、先生、給食や用務のおじさん、おばさんの顔が浮かぶ。そんな人とのつながりは、家で私と二人で勉強しては得られないものだ。勉強にしても、ひとりで考えることも大事だが、友だちとやりとりしながら学んでいく事の意味は、とても大きい。娘は与えられた勉強を楽しむ方ではないと思うが、それ以外の部分では楽しいことをたくさん見つけられると思った。娘にも、夏休みまでには楽しいこ

とがたくさん見つけられると思うから頑張ってみよう、夏休みになって、まだ学校へ行きたくないようなら、その時また考えようと伝えた。先生も心配して下さって娘へお手紙を下さった。ちょうど遠足というきっかけもあり、また学校へ行き始めた。こんな風にして始まった一学期だったので、成績がどうより夏休みまで頑張っているってほしいということで精一杯であった。通信簿のことなどまるで忘れていたし、娘は通信簿すら知らずに終業式を迎えた。「先生に何か紙をもらわなかった。」と聞くと、「もらったよ。」「これなに。」と聞くと、「知らない。」という具合であった。すでに娘の気持ちは、明日から始まる長い夏休みへ向いていた。

### 〈夏休み〉

夏休みを迎えるにあたり、私としてはひとつだけ心に決めていた。それは、机に向かうことだけが勉強ではないのだから、一日中遊びまわっていても何も言うまいということだった。計算カードなる物を一学期にもらって

きても、娘はほとんどやっていなかったし、本当なら毎日少しずつでもやってほしいところだったが、ここは親のこらえ時と思い、ぐつとがまんした。夏休みの四十日間は、実にゆったりとした時間の流れで充実したものだった。娘たちは、仕事と決めたごみ捨てへ行くともう外で遊び始めた。それから一日中、姉妹や友だちと、ころころと実によく遊びまわるのだった。時間と空間と友だちと三拍子そろい、それは充実した毎日であった。私も娘たちも夏休みの間にじつくりとエネルギーをたくわえ、秋からの広がり期待していた。

### 〈楽しさが広がる〉

二学期から三学期にかけ、娘はたくさん楽しいことを見つめ始めた。下校時には、友だちとどぶ川で遊んだり、お花摘みをしたりと、まっすぐ歩けば十分もかからずに着くのに、三十分や一時間かかって帰ってくる。あゝる時は、いくら待っていても帰ってこないの心配していたら、まったく反対方向の友だちの家を二〜三軒まわ

り、友だちをそろそろひき連れて帰ってきたこともあった。あんまり遅いとお母さんは心配なんだけどと一応伝えたが、楽しみはつぶすまいと思うことにした。先生もこのことは御存知だったが、娘に対して通学路を守るようになどと注意はおっしゃらなかったで、娘はのびのびと楽しんでた。一年生の間に、もうひとつの楽しみを見つけた。学校では縦割りそうじが行われていたのだが、その班長さんである六年生の女の子と気が合い帰る方向も同じだったので、おしゃべりしながら帰ってくるのがよくあった。ある時は、普通に帰ってくる時間を二時間過ぎても帰ってこない。まあ暗くなれば帰ってくるだろうと思ったが、あまりほっとしてもと思い、探しに行った。角を曲ったとたんに見えた二人連れ、六年生と楽しそうにおしゃべりしてくる娘だった。家での調子とはまったく違い、おっとっと、顔を合わせてはいけないと思ひ、あわててUターンした。何と、六年生の授業が終わるまで昇降口で待っていて、一緒に帰ってきたのだった。(自分がやりたいことに対しては、本当に辛抱

強いと感心する。)祭りとか、楽しい学校行事もあり、授業以外の部分で大いに楽しんだ娘であった。勉強はと言うと、相変わらず親は何も言わなかったし、本人も家で勉強することは、なかった。けれども、テストで百点がいらしいということは、しだいにわかってきた様であった。通信簿にAがいくつあるとか、Cがないとか友だちと言うようになり、通信簿をもらった時は、少し気になった様であったが、それも、その時だけのことだった。

#### 〈親にとつての通信簿〉

我が家で通信簿がどう扱われているかというところ、私は一応ちらつとながめ、ほとんど何も言わずにしまつてしまふ。父親は、私が「通信簿をもらつてきましたけど、見ますか。」と聞くと、「いや。」と言うので見ない。二人共、通信簿には今のところあまり関心がない。なぜ関心がないかと言うと、いくつかわけがある。まず一つめに、元気に楽しく過ごせたらいいと思つている。娘はぜ

ん息があり、もう六年間も毎日薬を飲む生活をして  
いる。発作がおきれば、かなり苦しい。しんどいことは、

もうたくさん。元気に楽しく過ごせればいいと思う。そ

れでも体の調子がよい時が続くと、親も欲が出てきて、

もう少しなんとかならんもんかと思うが、苦しくなると

またここへ戻るのである。二つめには、小さい時遊ぶこ

とが、大きくなった時にきつと根になると信じている。

今、勉強をやらせて成績をよくしても、その失った遊び

の時間は戻ってこない。三つめは、今成績はよくなくて

も本気になったら、きつとやると信じている。これは裏

切られるかもしれないが、今のところ私たちはそう信じ

ている。そのためには、まったく手離しにしているわけ

ではなく、基礎として学んでいてほしいことは、押さえ

たいと思っている。だから、私たち夫婦にとって通信簿

は、まあどうでもいいことなのだ。

ところで、最近気付いたことだが、(まわりのこと

は、あまり気にならない私どもなので、気付くのは大変

遅い。) こういう親は、珍しく、皆さん通信簿をかなり

熱い思いで見ているらしい。私たちが少し変わっている  
のだろうか。

### 〈がんばる娘〉

二年生になると、娘は俄然頑張り始めた。何を頑張っ

たかというと、百冊読書、マラソン大会、読書感想文、

係の仕事、書き初めなど、賞状をもらえるものが主で

あった。やってみても賞をもらえなかったものが多い

が、やってみようという意志を持ち、行動に移したの

だった。

夏休みも自分で計画を立て、やるべきことはやった。

ラジオ体操もプールの短期講習もその意気込みたるやす

ごかった。結果はどうであれ、自分で決めたことは、

しっかりやりとげた。一学期から夏休みにかけての娘を

見て、親たちは娘の成長のすごさに感心していた。

一学期と二学期の終わりには、個人懇談があり、二回

ともまったく同じことを言われた。どんな話だったかと

いうと、誰かが牛乳をこぼしたりすると、いつの間にか

娘が行って助けてあげている、そんなやさしい面がある。学習においては、大筋は理解しているが、正確さに欠けることがネックになっている。ただ、この正確さということをとこの人に求めて、型にはめてしまうことがいいことかどうか疑問だ。やればできる人なのだから、このまま本人の成長とやる気待ちたい。クラスで上の方ではないが、まあこのままでいいでしょうという話だった。まったく私と同じ意見であった。一学期も二期もまったく同じ内容だったことには、大変失望したが、娘のことを理解してくれている先生で助かった。

だが、こんなに成長したと親が思っているのに、先生の目には何も映らなかったのだろうか。それとも、学校という場では娘は何も変化がなかったのだろうか。先生は、通信簿の項目でしか子どもたちを見ていないのだろうか。人と人との本当の出会いが学校ではできないのだろうか。いろいろな思いがわいてくる。娘などは、通信簿に結びつかないところで頑張っていた。通信簿なんて枠に入りきらない子が他にもきつというだろうかと思う。

### 〈おはしを噛み折る〉

二期期の後半は、百点が多かった。いつもは、バラバラとしかないので続けて百点を持ち帰ったのだ。ひよつとすると今度の通信簿は、どれか一こくくらい上がるかなと思った。(成績はどうでもいいと言ったが、この位の感じでは気になることもある。)私が思ったくらいだから、本人も少しは期待した部分があったと思う。ただ、私は個人懇談の先生の話で、あまり望めないことだと感じたが本人には何も伝えていなかった。

二期期の通信簿をもらってきた日、どうも娘のきげんが悪い。何やらぶつぶつ言っているのを聞いてみると、今まで自分がもらった成績で一番よかった一年生の二期の時より悪いと言って悔しがっていた。余程悔しかったらしく、昼食時には使っていたおはなしを歯で噛み折ってしまった。それは悔しそうだった。だが今の娘の状況では成績がAになるのは、むずかしい。何としてもおちよこちよいとか、ていねいさに欠ける部分が多いのだ。漢字で書きなさいと書いてあるのにひらがな

で書いたり、ちょっとした計算ミスなどが、ちよくちよくある。もつといい成績にしたいと娘が思っていた様だったので、もう少し注意して、ていねいにやるのと伝えた。三学期になってからは、先生に字がきたなくて「読めません」などと書かれることもなくやっているようだ。

考えてみれば、通信簿をよくしようとすることは、むずかしい。今の相對評価では自分が頑張っても、まわりが頑張れば成績はよくならないだろう。先生によってつけ方も違うから、担任が変わったら成績がぐっと下がったという話も聞くことがある。通信簿を少しでもよくしたいと思っている子どもたちに、何をどうしたらいいか伝えられないというもどかしさ。やはり相對評価の通信簿を少し考え直してみてもいいのではないだろうか。評価をするなら、その評価を上げたいと思う子がそれに向かつて努力できるようなあり方をしてほしい。

それにしても、たった一枚の紙が、ただの紙きれからいろいろな意味を持つようになり、私としては、複雑な

気持ちだ。できることなら、通信簿が娘の成長とやる気を育てる一助になってくれればと思う。通信簿を書いて下さる先生方はたいへんだと思うが、一喜一憂しながら見る子どもの（親もとという所が多いだろうが）気持ちを考えて書いてほしいものだ。

今、娘は学校が楽しいらしい。かぜをひきかけていると、明日の献立を見に行き、○○だから絶対食べに行かなくちゃと言ってみたり、明日は○○集会だとか、あたしは係の仕事やかけざん九九の先生役で忙しいのよとか言っている。時には、隣の席の子と髪をつかんで大げんかしたりもするらしい。勉強のことはおいといて、娘は学校という生活を楽しんでいる。